

昭和二十六年七月二十五日發行第

三種郵便物認可
(毎月一回・十五日發行)

(通第一四六号)

慈光

第十三卷 第五号

目次

意識「自力他力事」……………	花田正夫…(1)
教行信証「信卷」講話……………	近角常観…(4)
根機相應の法……………	長谷顕性…(12)
心と眞実……………	佐藤強三郎…(15)

意識『自力他力事』

長樂寺 隆寛律師作

念仏の行について、自力と他力ということがある。

これは、すでに聖道の諸行は及び難いと知つて、浄土門に帰して、弥陀の名号を称える人々の中で、自力のところで念仏する人と、他力の念仏者とがある。

まず、自力のころというのは、身にもわるいことはすまい、口にもわるいことはいまい、心にもまちがつたこととおもうまいと、このように、つつしみつつしんで念仏する者は、自分の申す念仏の力で、あらゆる罪障を消滅して、浄土へ間違ひなくまいろうぞと、思っている人をさして、自力の念仏の行者というのである。

このように、わが身をつつしみ、よくととのえて、立派になろうと思うのは結構であるけれども、まず世間の人々を見ると、どこどこまでも、理想通り完全につつしみ得るということとは、極くまれなことで、そうしたことはほとんどありえぬことである。

そのうえに、このような考えの人は、弥陀の本願の意趣をはつきりと頂いていないというあやまちをおかして居る

念されて、一寸の間も、目をはなされることもなく、いよ／＼いのちがつき、息が絶えようとする時には、よろずの罪障をばみな消滅して、立派なものに転化して、極楽浄土へひきつれて帰らせて下さるのである。

そうであるから、つみの消えることも南無阿弥陀仏の願力によるのであり、正しく浄土に生れさせて頂けるといふ立派なくらいを得るのも、南無阿弥陀仏の広大な誓願のちからである、また永遠にまよひの境界をはなれさせて頂けるのも阿弥陀仏の本願のちからである。極楽に生れて御法をきき、さとりをひらき、そのまま仏になれるであらうことも阿弥陀仏の御ちからであるから、一步も、半歩も我がちからで浄土へまいることはないと思うて、ほかの行を難じえずに、一向に念仏するのを他力の行とは申すのである。それをたとえたと、腰が折れ、足がなえて、自分のちからは立ちあがるすべさえない身と同然である。まして遠いところへ行くことは、思いもよらぬことであるけれども、たのみちからになつて下さる方があつて、これを可哀想と思召して下され、しつかりとした人を沢山つれて、①力者に興をかかせて迎えに来て、やさしく興にのせて帰るとすれば、十里、二十里の道もらく／＼と、野をも山をもほとんどなく過ぎることが出来ると同様である。

われらが極楽にまいろうと思いたつているのは、罪障も

のである。それだから、たとえ自分の理想通りに身口意の三つを立派にやりとげて生命を終えたにしても、それでは真実の弥陀の浄土に生れることは出来ないで、わずかに浄土の辺地に生れて、そこで本願にそむいていたつみをつくのうてのちに、真実の浄土に生れることが出来るのである。こうしたことを自力の念仏というのである。

他力の念仏というのは、わが身のおろかで、わるいにつけても、かような身で、どうして、この苦悩の娑婆世界をやすやすとはなれることができるか。罪障は毎日々々つみかさなるばかりであり、妄念はつねにおこりずめでとどめることも出来ない。こうした始末であるにつけては、ひとすじに弥陀の御誓をおおぎたのんで、念仏をおこたらなければ、阿弥陀仏は、かたじけなくも、御身から遍照の光明を放つて、われらがこの身を照らしてお護り下されて、観音菩薩や勢至菩薩など、数限りのない聖衆をともしなわれて、行住坐臥、もしは昼、もしは夜、どのような時でも、又どのようなところでもわけへだてなく、念仏の行者を護

深く、煩惱も厚いことであるから、腰が折れ、足のなえた人々にもまして。只今にも臨終となれば、朝夕に造つた罪が重いから、頭下足上と、まつさかさまに、②三惡道にこそおちるにきまつているのであるけれども、ひとすじに阿弥陀仏の誓をおおいで、うたがひなく念仏申せば、間違ひもなく、③只今臨終という時に、阿弥陀仏が目の前にあらわれて、つみというつみをば、すこしものこることなく功德に転化して、微塵の煩惱のけがれもなく二度と迷うということのない真実の浄土へひきつれて、帰らせて下さるということを、釈迦如来がねんごろにお勧め下されたことを深くたのんで、二心なく念仏するのを、他力の行者と申すのである。

このような人は、十人は十人ながら、百人は百人ながら往生することが出来るのである。このような人を取りもなおさず一向専修の念仏者とは申すのである。同じように念仏をしながらも、自分の力ばかりをたのんでいるのは、大変な間違ひである。

謹みてしるす。

寛元四歳、三月十五日、書之。

愚禿 釈親 鸞 七十四歳

註 ① 力者。昔剃髪した仲間のような者、興をかき、馬の口につき、又長刀などもつて供につく。

註 ② 三惡道。地獄・餓鬼・畜生の三つの悪い境界。

註 ③ 觀無量寿經の下品下生の惡機の臨終に、幸に善知識に勧められて、称名裡に往生する、これを我身にひきあててよるこべとのころである。

解説

聚墨生

本書は、自力、他力の念仏を明かして下さった隆寛律師の法語であります。親鸞聖人が、本書を一念多念分別事と共に、度々書写されて、關東の同行の信心諍論の時のおしえとして送られました。

幸に本願他力念仏の教にあり、惡人救済の德音をきながら、「さすがよからんものをこそ」という自力我慢の心があつて、絶対他力の教に入り難いのでありますが、そこを特に悲憫されて、「腰折れ、足なえ」の身と知らし、我等が能力、我等が分際を指適されつつ、救いの御手をここにとどけて下さる宝典であります。

三河の了詳師が「足の弱い強いを論ずるのは歩いて行く人の話である。のせてつれられる身には無用である」と申されたのもこのころであります。

一道会館にての講話十年に満ちぬと承りて

福島政雄

いつしかも十年経にしか一道の法の集ひの嬉しき御縁

歎異抄身にしみじみといただしそのおん集ひなつかしの家

御老母

八十路超えし身にましますを法の座に列なりませし御姿たふと

大經の御座

大經の御座にすらなり御仏の御言うけにし此の身をおもふ

第十八願

ありがたき第十八のおん誓ひ五逆の身にもしみわたるかな

〇 令室

せのきみの求法の御旨身にしてみえしそしみたまふそのみすがたよ

煩惱の身

煩惱の身にしあれども一道のそのみ集ひにみちびかれ行く

不淨說法

五逆の身闡提の身をかへりみず道を説きける我が身なるかも

久遠の光

あゝされど南無阿弥陀仏南無阿弥陀久遠の光われを照せる

華嚴の御座

師子奮迅華嚴の御座にわれもまたつらなれるかも光かがやく

昭和三十五年十二月 詠

教行信証『信卷』(一)

—— 求道誌第八卷第四号 ——

近角常觀

此度は聖人の教行信証の信巻を述べたいと思います。それに先だち、まず報恩講式文を拝読しようと思います。御承知の方も多いでしょうが、親鸞聖人の御伝の大体を覚如上人が、その徳を讃歎しつゝ書かれたのが、この報恩講式文であります。いつも聖人の御命日に読むことになつて居りますが、今年はことに聖人の六百五十回忌にあたり、この年に於いてはからずも、かゝるさゝやかながら、有難い会のひらかれたことゆえ、万事不規則ながら、そのつもりで、先ず報恩講式文を拝読しようと思ひます。

(式 文 拝 読)

さてこの教行信証と申すは、云うまでもなく、親鸞聖人の信仰の真髓をお書きになつてある書であつて、聖人が稲田に於いて、五十二歳の時この書を御撰述になりました。

この書は昔から非常にやかましく申して、容易に読むべからざる書とせられ、これを読むことにつきて、余程注意を致しました。それ故これを今読まして貰ふことも、かゝる六ヶしい意味ではとても出来ませんが、聖人が常にあな

たのお喜びになつた御信心、及び御喜びになつた御文を、私も数年毎日喜ばして頂き、拝読させて頂き、その喜びを毎日曜毎に、お話をしたすに外ならぬのであります。さりながら、かく書物につき、際立てゝ御話することが御座いせんから、近頃そういう話も聞きたいと云う希望も出て居りますし、自分も本につきて、御話しようと思うのであります。いわばあまりに無遠慮な僭越なことではあります。聖人の御苦勞を喜ばして貰うつもりであります。今申す通り、平日の話の如く信の上より話すこと故、六ヶしく思はず、私も六ヶ敷く話す意なしに、聖人の喜ばれる仏の御慈悲のまゝを話さして頂くつもりであります。処で、これより読む文は『教行信証信卷』の特別の序文で、大切の文であります。これは浅草の坂東報恩寺の聖人の真筆には、ことにこの処が、実に著しき聖人の筆蹟を以て、書かれてありますが、真宗を御開きなされた聖人の何より肝心の要点、即ち信心について書かれた様子が筆先に現れて、その書き出しの御文は実に著しい筆であります

願浄土真実信文類序

夫れおもんみれば、信樂を獲得することは、如来選択の願心より發起し、真心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顕彰せり。

この句は、多年お聞きの方は、私が口に筆に何百遍繰り返したかわからぬ御文であることは御承知でしょうが、この二句が畢竟信樂の精神であつて、これを頂くとこの外何も云うことが無いのであります。

「夫れおもんみれば、信樂を獲得することは、如来選択の願心より發起す」、ひそかに考えてみれば、信樂、即信心、樂は愛樂、ねがう、如何にも信心の喜ばしき思い、仏を慕い、喜び、ねがい憧れる心地がこれにあるのであります。殊に第十八願に「至心信樂欲生我國」と仏が仰せられてあります。されば疑いなく大慈大悲の仏を信じ願ひ、その仏に安心させて貰うことが信樂、この信樂開發して一念發得すれば、信仰の問題はそれで解決するので、人生問題もここに初めて解るのであります。進んで云えば永却の問題が解決して、仏の大悲が心に届き、仏を疑なく、心に有難く喜び、仏の下に参らして貰うことに決定するのであります。

るのである。他力の味はここにあります。他力だと云うて仏にこちらから打ち任せて、投げやりにするのではない。他力とは本願力なりと仰言つてありまして、明らかに大慈大悲の仏あり、その仏が迷える我等を哀れと思召し、遣る瀬なき御心より殆んど一分も余祿なく哀みて下さる、その遣る瀬なき親心が吾々に貫徹したのが他力であります。

ここで際だてて申したいのは青年の方が信仰を求むる上に種々の予想があります。しかし信仰とは吾々の心に悦ばしき思いの起る一つの実験であります。自分の心に仏があると思ひ修養するのではない。信樂を獲得することは明らかに直接仏に接し、明らかに直接光明に触れ、明らかに大悲を実験し、云うに云われぬ信念が心に現れたのが信仰であります。

それになりたいとおもうても此方から待ち設けたる心の状態では何時までも得られません。信樂獲得とは即ち実験というてよい、大悲のために未だ経験なき喜が現るるのであります。結果にはかゝる信樂が現れますけれども、その思いの起るにはその源があります。その味の味わえるのはその本の味があるから味わられるのである。

この宇宙人生に明らかに我等を憐れむ真実の仏ましまし、遣る瀬なく思召す大悲の真心ありて、それが届きし一念に喜が起るのであつて、其お慈悲を頂く外に実験も何もあ

獲得は得るといふこと、『自然法爾章』には

獲の字は因位のときうるを獲といふ。得の字は果位の

ときにいたりてうることを得といふなり。

とあります。この娑婆で信心を得て、正定聚の位に入ることが獲、極樂に往きし有様が得。『正信偈』にも

必獲入大会衆數 得至蓮華藏世界

とあります。この娑婆で信心を獲、極樂へ往つてから法性の悟を聞くのであります。かくの如く我等行者の上につきて獲得の字を使い分けてあります。

されど今『自然法爾章』の御言葉では、因位、果上のことは、私のことではなくして、この信心獲得の出来るは、仏が因位の時、仏が果上の時、仏が阿弥陀如来となり給わざりし前が因位、仏となり給ひしが果上であります。かゝる因位果上の恵みにより、吾等が往生するなりと、八十八歳の御時お書きになつたのであります。

故にかく信樂を獲得することは、心に信心發起し歡喜すること、これが如来選択の願心より發起するのであります。信心とは吾々の信心を得よう、仏を喜び、善き心になろうと勵みて起るのではありません。仏のたすけようと云う親心より吾々の心に起るのであります。仏の遣る瀬なき誓願の御心ある故、其御心が吾等の心に届きし時、信心開發す

りません。頂かにやらんと思つて居ては大悲が心にとどきません。この苦める迷える我々の心があるために、如何にも今日まで大悲の親様に苦勞をかけました、この一念を頂かしたいと思召すこの仏心より外に他力ということはありません。

斯く云えば、それでは、そういう仏があると思えば、それが信心であるかと云うに、そんなまだないものではない確かに待ちかね給う仏の仰せは、この悩める我々を一刻もやむ暇なく思召すのが、選択本願であります。かゝる仏、親様のましますことを如何して私の心に知らして下さるかと云うに、なお従来真宗の説教を聞き、真宗の云う所を御承知の方に、ぎわを立てて申したいのは、仏の本願ということが耳馴れて居るから、この大救済が殆んど、何でもないうに軽々しく思うて、この謂を聞いても、深く戴かぬのであります。それ故私は本願を疎かに聞き、信仰も著しく戴かぬことに就いてここに際立てて、今更の如く御本願の御謂を申しましよう。

それは第一御同様が何処より来りしか、又何処へ行くか何も知らずに營々として日夜働いて居る、なお考えてみれば、皆自分々々を中心として欲を起し、我慢を立て、生活を求め、人に対しては隔て心を起し、或は種々悪しき心を

起して日暮をし、又は怒り、貧り、何の考えもなく唯つまらぬ自分の考えを目当に日常生活をして居ります。我々は煩惱深く、罪惡多くして、浅聞しいものと一応思いますけれども、人間にこういうことがあるものに、遂あたり前のことと思ひ、そこでかゝる我々が大にしては一生の仕事、小にしては日々の起居動作に至るまでやつてゆく。結局の問題は如何云うことに依つてかたがつくかと思へば、五分五分に争うているので、仮に一寸譲り、世話もし、同情はしても、皆相対であつて、日々の日暮は一々皆無意義であります。平日はそれでもよけれども、遂に人生の大問題につまずいてしまふ。自己や世の中を考えて見れば皆五分五分のことをして、よしあしと云ひ、日暮をしているのであります。

私自身の最も苦しみましたのは、人に対して立派に出来よき事が出来ると思つたのが、最後にそれは偽で、結局人は争ひ、隔て、一つのよき心なく、日夜共に苦しんでいるのであつて、殊に自分として、如何しても安心の出来なかつたのは、疑うものに隔てんようにし、敵によくして行くことさえ出来れば、人生はもう解決出来るけれども、それが出来ぬ。飽く迄によくするということは出来ぬ、最後には皆五分五分の争ひをし世の中は十惡、五逆をやつて居る斯る人間が如何して解決がつくかといへば、飽くまで、戒

無けれども、有ると思うのであるというのは、實際無いのである。そこで御本願に、総ての人の結局迄行きて、罪の深き、よく出来ぬ解決出来ぬものを憫れと思召すのである。これが肝心であります。

大抵は救と憫れと離れて居る。哀れだというのは、つきとめて、して見ようなきもの、それが哀れだとの仏の心である。それが有るか無いかで此世の問題が解決するのである。他力とはこの親様の本願である。

十方衆生皆苦しみており、如何なる善人も、惡人を憫れむということとは出来ぬ。結局善人は崩れて了う。かゝる五分五分の考えの止まぬ者に対し、五分五分でない、かゝる者を可哀想と云うのが親心であります。

病気で、不具で、して見ようなき子をよいと云う親は無けれども、斯様に人に見棄てられて居るものが、親としては一層不憫である。かゝる人はどうかして助けたいとの遣る瀬なき心より、五分五分の為に苦しんでおる人の心に、かゝる察しのある仏心をとどけて、子供がこれを知つて有り難いと頂くよう、こんな己のようなものを哀れむ仏が在せしかとコロリと其迷をはなれ、苦がとれるよう、その者を助け、助けんために仏になる、若し仏心を屈けずば、我は仏と名のるまじ、仏となつた以上は、病氣に悩み、日常生活に苦しみ、惡業を犯し、立派なことをしておれば、して

律を守り、坐禪をやり、倫理、道德で絶対によく出来れば解決がつくのであるけれども、さてそれが出来ないのである。そこで問題は斯う云うのであります。

この人生に我々は斯様に悩み、五分五分に考えて苦しんで又それをやめることの出来ぬ人間となつて見れば、かゝる私に對し、よくならねども、隔つれども、眞実ならねどもよくその心を知り抜いて、それを駄目だと退け、咎めることなく、又悪くてもよいと投げ置くのでなく、投げておくでは助けにならぬ。悪くてもよいでは安心は出来ぬ、悪くてもよいで安心が出来る位なら苦しまないのである。タツタ一つ、斯る浅聞しき心のある吾々に、その悪い心が可哀想である、成る程それは、よいことはないが、人間としては、その心がとれぬ処が可哀想である。その問題の解決出来ぬものを可哀想と思つと、吾々苦しめるものの心をよく知り、斯くの如きものを却つて可哀想と思つて見捨てられぬ、いじらしい、だから汝の親となり、同情者となり、隔て多き苦しみ多き汝のことは、充分解つて居る故心配するなど、眞の慈悲の同情から、言葉斗りでなく、實際同情の涙をそいで下さるのが仏であります。本当にこの仏がなかりせば、此五分五分の人生に如何に慎み深い人でも、安心は出来ませぬ。それで問題は、そう云う方がこの世にあるか、無きか、唯これでありませぬ。

おで衝き當りて苦しむ。一人一人の十方衆生に、無限大悲の慈悲を知らして、この迷を解き、仏心に出会わせ、仏の境界に導き、仏の國に集め、未來の苦しめる者に安心させるように出来ねば、己は仏となるまいと云う御誓である。此誓は実に軽く思つてはいかぬ。仏の此世に来る大本はこの心を衆生に届けねば、仏とならぬ、沈みに沈んでいる人間を悉く助けんがために我は仏となるのである。この心から五劫が間思惟し、永劫の間修行して、遂に現れ給ひし仏である。十劫の昔より仏の待ちかね給うことは解らぬが、種々の問題が解決出来んで苦しみて居たが、これを哀れと思ふ親が居るぞと、本願成就以來、我々に対して向つて下さるのが親様の心である。

越中に非常によく念仏する人があります。以前、伊勢の村田師につきて聞かれたのであります。爾來十年、御念仏を申して、その感化で多くの信者が出来た。その人の云われるには「近頃大へんお念仏がゆるんできた、如何」と私に聞かれた。左様実に貴く私も恥じ入る計りであります。で私は、一応私の考えだけを云いました。最後に私は何時も申す借金例を申しました。

仏が借金を済してやると仰言る。仰せは有難いが、如何にも借金が多う御座いますと遠慮する。

それでは私の持つて居る金の量を疑うのか。いや決して金の量は疑いませぬが、いつて悉皆打明すつかりうちあけようとはしない。金の量も疑われないとすれば、それでは己の親切を疑うのか御親切は誠に有難いが、どうもこんな借金をお渡し申すことは出来ませぬと、有難いことも、悪いことも知つて居り有難い程悪さもわかつて居る。然しこんなことではと、まだ遠慮して居る。

丸呑みする人が、斯るものと、丸呑みにして、本当に解つて居らぬ様に、その人にも言えぬ借金し、その悪いことを私が知らぬと思うか。そのために汝が悩んで居るから可哀想だと言うのではないか。汝はその悪い心を打ち出せぬと思うから後しざりをするのだが、その借金があるから可哀想だと云うのでないか、と私は斯様に仰言る。

するとまだ斯う云う人がある。その私の心は有難すぎて頂けぬ。然しこれは仏心を尊く頂いた様だが、器物の蓋ふたが大きすぎてあてはまらぬと同様、謙遜して居るようだが、自分がまだよくなれると予想して居る故、仏の救が自分の悪に今わぬのである。そのして見ようのない者を、よく知るし召してそれを助けようと言うのが仏心である。この御仏のみ心ならずば、一分一厘よくなれぬ奴だから可哀想と仰言るのが丁度あてはまるのである。

その借金を承知して、それを可哀想と思うぞよ、とこれ

我が念力である。我々が貰わねばならぬ様に御心を籠めさせられてある南無阿弥陀仏である。このやる瀬なき親心を、我々は戴かねばならぬ。

『夫れおもんみれば信樂を獲得することは、

如來選択の願心より発起す。』

一分一厘でも此方から貰わにやならんと思つてはならん今此処に居られる林君が安心せられたも此処である。

いよ／＼私が会津出立の時、如何かして南無阿弥陀仏を得にやならぬと苦しんで言われた。私、その得にやならぬではいかぬ。得られるよう、称えられるようにチャンと仏の方でしておいて下された御念仏であると聞いて忽ち安心された。

御の越中の人も十年も称名念仏して居たが、いよ／＼私の出立の時、気がついて「本誓、重願じゅうがん虚しからず、あり余つた宝を下さるのではない、わざ／＼この私のために作つて下さつた、私に称えさすために与えねばおかぬとの仏の御誓から御廻向下さつた御念仏を今迄沢山そうに軽々／＼と称えておりました。ただ金があるから下さつた様に思つて居りました。この念仏が斯る私の為にやろうとてこしらえて下さつた、この心が解らぬかと、今日まで待ち給いし本願の御心かと気づきました、おろそかに思つて居りました。借金に悩み、五分五分の心から到底放れぬ奴、これを

まで言えはよいのだけれども、猶疑つて見れば、金は仏の金、仏の宝、仏の力、その御親切は疑はないけれど……まだ私の借金は私の責任と遠慮する。

そこで仏の仰せられるには、これは、三井、岩崎の様な金があるから与えようと言うのではない。汝が斯る借金を持つて居るから可哀想と思ひ、その悩みを救いたいために積んだ金である。丁度ここに金があるからと言うのなら、遠慮もあるが、その苦しめる者にやろう、やらねばならぬとの考えから積んだ金だ、との仏心を聞きまつりては、如何して遠慮が出来よう。

本願とは、汝等貧しき者にやろうために我が態々わざわざ現れて積んだ金である。

『我無量劫に於いて大施主となりて

普く貧窮を濟わずんば

誓うて正覺を成ぜじ』

我々貧乏な者を救いたいために、現れ給ひしが阿弥陀仏である。

この宝をやる、やらんという段ではない。汝にやらねばならんとてつくりた宝ゆえ、汝もしこれを受けないならば私の今迄の苦勞は水の泡となる。南無阿弥陀仏の宝は水泡になる、悉く無益になる。ここにあるからやるのではない汝にやらねばならぬ、救わねばならぬというのが、我が誓

大悲でつき破り、通常であからぬ鍵を開けてやると思ひから、仏になつて下された。この広大な御心が南無阿弥陀仏であるとは、十年來称名しながら、今日初めて斯る広大の御心でありしかと「非常に喜ばれました。

得にやならぬと思つて居る間は此方に力がいらいます。仏がましますのは私一人のためであつたかと気づいて見れば直ちに頂かずには居られませぬ。

選択とはえらびにえらぶこと。選の字は、仏が我等のために、よきものを選び給うのであります。丁寧ていねいに云うときりがありませぬ故、くはしきことはあとにして、択えらとは、えらびずること、我等が仏になる道に、戒律、坐禪、観念、道德等沢山ありますが、此等によりまして、我等が助かる位なら、仏が現われ給わぬのであります。

破戒、無戒、愚痴、無智の者の為に、戒も捨て、坐禪もえらびずて、皆えらび捨て、最後の一つ、何を選び取るか云うに、斯る無智、愚痴、無能の者が、何も出来ぬからそれを助けようという仏の御心から、我々に出来ぬものは悉く択えらびずて、出来ぬものを助ける親心もて、南無阿弥陀仏一つを知らせ、それ一つを選び取り、斯る放逸極まりなき者を助けんが為に、罪業深重のものを助けることが出来ねば仏とはならじとの仏心を封じこめた、南無阿弥陀仏一つを与えられたのである。これ一つで救わんと念仏

なれば、選択本願念仏というのであります。故に如来の願心は、かかる極悪深重の者を助けねば措かぬと誓わせられたのであります。この函蓋相応がまことに有難いことでもあります。

この如来の御救でなくば、この曲つた私の身は如何にしても救われぬ。かくの如く曲つた函と蓋とがピンとよく合う。如来の選択心はこの罪の人間に、罰の者を目当の御救いでなくば合いません。むつかしい錠前をあけるには普通の鍵では開かれぬ、これに丁度適当したかくの如き鍵がなければ開かれぬ。我等悪業の凡夫はとて戒律等では開けることは出来ぬ。曲り曲れる悪しき我等には、特別の南無阿弥陀仏の金剛の信心ばかりにて、長く生死をへだてける函蓋相応というは此処である。

又親が着物を拵えてくれる。これがよすぎるといふは、親の子をよく言うたのではない、即ちそれが適せぬということである。その手織がよすぎるといへば、親は私の欠点をよく知つて居るのでないことになる。よすぎるとではない。私の汗かき、乱暴なる缺点是よく御存じで、そしてそれに應ずる丁度よい、適当のものを作つて下さるのである。選択願心もこの如くであります。私の心を見抜き、そこを救わんと言ふ仏の遣る瀧なき御心が、如来選択

の願心であります。

かくの如く私の機に相応せる本願なれば、他の道で行けぬ私が、仮令人がそれは虚假だと云うても、他の道で行けるなら疑うことも出来ようが、これ一つの御心を承つて見れば、私一人のためなりけり、たゞ南無阿弥陀仏と、選択願心の有難きことを喜ぶ許りであります。

当り前で助からぬ病人のために特にこしらえあげた薬は危篤の病人が飲まねば助からぬ。それを自分は危篤と知らずして、まだ外に薬がある様に思つておる。自分は到底見込のない、すべての医者が見放した重病人であると悟つた時は、その瀕死の病人のために特につくりし薬でなければ到底たすからぬ。この薬をこの病人が頂く時は、この薬は毒ではないか、などと危み疑うところではない、よかれあしかれ、有難く飲まずには居れませぬ、無辺極悪の危篤の病人に対して下さつた如来選択の願心もおなじである、これは最も肝心なのであります。この一週間は飽くまでこ

未 完

(註) 明治四十四年九月発行「求道」所載

根 機 相 応 の 法

—— 川畑愛浩氏をおもう ——

長 谷 顯 性

学校から疲れて帰つて来ると、本家の石垣の傍で息子正当に逢う。川畑愛浩さんが死なれたと、倫子姉さん(当時名古屋にあり)から葉書でいうて来たという。

かねてから、あるいはとおもつていたが、そうなつたのかと、暫し呆然自失。葉書を読んでもみると、中部日本新聞に川畑さんの死去が報ぜられているのを見て、びっくりしたとある。

ひとり仏前に、灯火を献じ、香をたき小経を読誦した。その晩は愛浩さんを偲んであかした。翌日、三重県立大学から愛浩さんの葬儀が三月二十七日に行われることを知らせて来た。当日は勤務のため参列叶わず、遙か北越の片ほとりより謹んでおがんだ。

私は愛浩さんとは深い御縁があつたが、その最後のものを一つ書き誌しておきたいとおもう。昭和卅一年の春、息子が京都の学校に入学した時附添うて入洛し、愛浩さんの兄さんの愛義さんを研究室に訪ねて旧交をあたため、それから、約束のところへ行くとうと、吉田分校の正門を出ると

愛浩さんが向うからやつて来られて、

「やあ!兄さんの家を訪ねて来たんだが、兄さんからこへ電話があつて、長谷さんが来ているから話にすぐ来ないかと云われて、これはと、すぐ飛んで来たんだが。」

さあ、どこかで一緒に話そうぢやないか!

というわけ。同じ屋根の下で、同じ釜で一緒に食事をしていた鹿ヶ谷の学道舎時代から二十年振りの邂逅だつた。

ありし日のことみな懐かしく、お互かわつた身の上に、かわらぬ友情を感じて、私もすぐそうしたかつたけれど、その時、約束の人が待つていたのでどうしようもない。

「また後程逢いましょう!」

と軽い気持で別れた。それから何時でも会えるとおもつていたが、これが、この世に於いて永遠の訣れとなつてしまった。今から五年前の春たけなわの時のことである。あの時の元氣な声と顔貌とは、今もはつきりおもひ出されてくる。

それから暫くしてから愛浩さんが、アメリカに留学され

たということを書いた。向うでは黒人の間に這入りこんで自身のめざすところをぐんぐん追究して、着々成果をあげていられるということをもきかされて、さすがは、我が愛浩氏、ちや、えらいもんぢやと、自分のことのように自慢にしていたものだった。

ある日、アメリカから珍しく航空便が来て、愛浩さんが私の『慈光』誌に書いたものを読んで、懐しくなつてたよりをしますとある。いわく

「何でも自分たちは若い時分は信仰熱にかされて大いに氣焔をあげたものだったが、あの頃の眞摯な人たちも、時世のうつりかわりと共に、みんな一かどの大家になつて得意の鼻を動かして弁じているようだけれど、何ぢやい、皆旧態依然のマンネリズムじやないか。兄以て如何となすかくみるわしの意見に対して何とか言うてくれ云々」

私も久々で、元氣な愛浩少年の雄叫びに嬉しくなつて、長々と所感を書いて送つた。何というたかすつかり忘れてしまつたが、愛浩氏おれはやるぞ、愛浩氏に負けるものと力んでいたことは今も覚えてる。

留学二年、愛浩さんが、めでたく帰国されたときいた時は、私は身辺の障碍にうちひしがれて、訪ねて行く元氣もなく、余裕もない日を送つていたのだが、昨年、心臓をわるくして休んでいられるときいて、何か胸がいたく、今に

親の心の切なさに深く感動させられた。

越えて二月二十六日、また手紙が来た。

「……いかに三界は火宅とは申しながら、どうしてこう娑婆には苦惱が多いのでしょうか。……私自身、既に一年以上病床にあり、……まさに火の地獄のようです……長谷さんだつたら、このような現世の苦惱を信仰の上からどのように処理しますか。というのは、僕の考へでは、現世の苦惱に対して念仏は余りたしにならぬと思うのですが、どうでしょう。結局、前世の因縁とあきらめて念仏するより他に仕様がなんでしょうかね……」

「このような問題はとても手紙などで解決つく問題ではありませんが、長谷さんの御考へを簡単にお知らせ下さらば幸いです……」とある。

これは、愛浩さんが、信の友として私に相談されたものであろうけれど、私には、仏さまが、私をテストしておられるような気がした。立派な答案はできそうもないが、私はその頃、特に感ずることがあつたので、そのことをもつて答えた。文句はどうだつたか、はつきり記憶していないけれど、要するに、

「……現世の苦惱は自分の力ではどうすることも出来

してみれば、愛浩さんは帰朝後一回も講壇にも立たず、在米中の研究の成果を発表することも出来ないままに、遂にたおれられたことは、まことに惜しみて余りあることである。

昨年の十一月だつたか、息子の正当が、川畑愛義さんにきいたといつて、愛浩さんが危険な病氣になられたことを知らせて来たが、どうも本当とはおもわれなかつた。期せずして名古屋の慈光社からも、愛浩さんの病氣の重篤を知らせて下さつたので、どうしたものかと案じているのみであつた。

旧臘、年頭の辞にかえて見舞状を出し、早く元氣になれるよう申し送つた。然し、愛浩さんがどんな病氣で苦しんで居られても、深い信仰の上に生きて居られるのであるから、心底は裕々綽々として居られると信じて疑わない。この点は少しの懸念もないことを申したことであつた。

その返事が、今年の一月二日附の手紙で来た。その中に「いささかの所労のこともあれば死なんずるやらんと心細く思われて、信心をいただいても、全く情無いものです。……」

とありのままをぶちまけておられるのには頭が下つた。それから、手紙の中で、一人のお嬢さんが、どうか信仰にめざめてくれるように念願しているといわれた。子と思う

ないのだから、そのままにして「ただ念仏せよ」「ただ念仏となえよ」とおつしやつて下さる、その御心一つをたよりとさしていただくのみ、他のことはすべてかえりみることはいらぬ。この時は、自分のすべての苦惱はうすくなつて、軽くなつてしもうのを感じる。苦惱が勿論なくなるわけではなからうが、念仏せよとおつしやるお言葉を力としてまいりましょう……」

という意味のことを申しおつた。暫くしてから、また手紙が来て、

「……貴兄の解答は、考えてみれば別に目新しいものではないでしょう。然し僕の間に対してあのようにはつきり、あゝいう表現の仕方であえてくれるものはありませんでした。……貴兄の手紙は今後も保存して、時々拝見して、貴兄のいわれたとおりに見ようと思ひます。そうすればきつと貴兄のいわれたとおりになると思ひます……三月七日」

とある。あゝこれが愛浩さんの私への、この世における最後の言葉であつた。川畑さんは、私の答案に及第点をつけてくれたであらうか。

それから半月を経ずしてこの愛浩さんは浄土に往生せられたのである。私は愛浩さんによつて「ただ念仏せよ」のみ教が、私の根柢に相応したみ教なることを、いよく明らかに知らしていただいたことである。 昭和十六年四月十日

心と真実

佐藤 強三郎

第三編

第三罪の告白

二、三日して区長は夜遅く一人してまた信哉の室へ静かに来た。しばらくもじ／＼していた。いつもとは全く違つた沈痛な顔をして語り出した。声もかすれ、とぎれとぎれで区長「これは誰も知らぬ事ですが聞いて下さい。」

実は、私は分家（区長の）の財産を横領したのです。二十余年前に分家の主人が急病で死にました。

その時、分家の長男は二歳でした。私が後見人となり、分家の印形始め、何もかも預つて、一切をきりもりしていました。その間には、太平洋の大戦争が始まり、敗戦終戦、次には、日本の開闢以来の大変動が、次々と起つて来しました。

私はその大騒動をよいことにして、田畑、山林、金銭と表面、目につかぬ様に上手に、子供や女達をだまして分家の財産を横領したのです。これは日本中、誰も知りません。こんな悪い者でも助けて下さるでしょうか」これを聞いていた信哉はすこしも驚かず、

「心配しなさんな。氣にかけなさんな。私は決して呆れなさぬ。如何なる悪をも、決して見捨てぬ、その者を助け逃げなければ安んずる事は出来ぬ、仏とは成らぬ、という誓願です。心配しなさんな。……………」

私共一度、ひどい悪を犯せば、手を折つたり、足を折つたりした様なもので、片輪になつたと同様です。

横領した財産を返さなければ罪は消えない、尚考えれば返した所で汚名は一生消す事が出来ぬのです。いかに何倍にして返しても、罪は罪で残るのです。

誰も知らないと思つても、知つて居るものは、世界に必ず一人あります。それは自分です。自分の心です。その心が楽しまないのです。よろこばないのです。

人の眼をのがれ、人にほめられても、自分の心がよろこばない事は苦しい事です。一生治らぬ片輪の自分を、可哀想に思い、それをどこ／＼までも呆れ給わぬ絶対の慈悲です」

区長「それは本当でしょうか」

信哉「嘘だつたらどうしますか。これからの一生を、どうしますか。生きても死んでも解決が無いでしょう。……………」

嘘ではないのです。本当なのです。私も初めは何も知りませんでした。こんなことがあるとは知らなかつた。ところがそれが本当にあるのです。教えていただいたのです。それを聞いて、私が今日あるのです。」

区長「私が、貴方を家へ泊つて貰つたのも、実は世間をごまかす方法であつたのです。悪いことが腹の中にあるから、見栄を張らなければたまらないのです。世間を誤間かさなければ、いつ見破られるかと、それが心配でならぬのです。」

さいわい貴方は善兵衛と知り合ひであるし、伴の嫁は善兵衛の娘ですから、私からすると貴方に泊つて貰う様にしたのです。それで村内は勿論、村外からも色々の人が貴方を訪ねて来る、何時の間にか私の顔も広くなりました。

以前から私は、善兵衛に敗けまい、どうかして勝つてやろうと心掛けてきたのです。そして、どうやら嫁を貰つても、付合の出来る所まで漕ぎつけました。私の家は浄土真宗ですから、色々の話を子供の時から

聞いて居たのです。私はいくら聞いてもわかりません、もう六十過ぎました……………」

近頃は方々から人様が来て下さるのですが、私は分らぬ話を、分つた様な風をして、聞いているのです。それをよいことにして、交際をひろめているのです。……………」

貴方をダシに使つて来たのです」

と云つて、おそろ／＼信哉の顔をのぞいた。信哉はニコニコして、

「信哉ともに因として、ということがあります。即ち信ずることも、謗ることも、共に因縁として仏因を結ぶ。私は招待して下さればありがたいばかりです」と感謝した。

座はしんみりした。夜は更けて行く、もう秋の末である虫の鳴く音も絶え／＼で、風が寒い。あたりは時々枯葉のかすれる音が聞えるばかりである。信哉はぼつ／＼と語り出した。

「それは長い間、一人で御心配でしたでしょう。暗いトンネルの中を歩く様でしたでしょう。

……………」絶対の御慈悲は、そのあなたの悪いものをこそ、どこまでも呆れ給わぬのです。悪をもおそろへず、弥陀の本願をさまたぐる程の悪なきが故に、と

仰言るのです。心配しなさんな。

その様なものをこそ助けんと心がけて下さるのです。

……不正な財産は返さなければ、自分の良心が許さないでしょう。困つたことには、返しても汚名は消えぬのです。一生治らぬ片輪も同様です。

一生治らぬ片輪だから、それを気の毒に哀れんで下さるのです。」

信哉「助けるとは、心を助けて下さるのです。悪人をどこまでも呆れぬとの御心をきくことです。

助けるとは物をくれることなく、罪を許して無罪にすることでもないのです。

横領した金は返さねばなりません。金が無ければ刑務所で服役しなければなりません。この世に於いて死刑の判決を受ければ殺されなければなりません。

助けるとは罪を許すことではない。自分の宿業のため、いかなる罪を犯すかも知れません。その罪のためになやめる自分を、どこまでも呆れぬというのです。

助けるとは、思いがけなきお方の深い同情をきき、その御心に感じ、謹んで罪業に服することである。衷心より、よろこんで服し、何時にても死刑に順う心構えが出来たことである。

懺悔の心、感謝の心、念仏の声、これ信順より自然に

区長は頭を下げたまつた。しばらくして、「ありがと御座います」と丁寧に御辞儀して、静かに室を出た。

第三 返しても罪は残る

区長はその夜寝てから考えた。

……自分は客人を泊めれば、よいことがあるだろう、善兵衛に喜ばれるだろう、と思つた。ところが段々話はとんだ処へ発展した。捨吉は懺悔して白米二俵を返す。あの金持で威張つていた善兵衛は、いつの間にか、貧乏人の捨吉の処へ、自分の方からわざ／＼出かけて、楽しく語り合う様になつた。その上、昔の恩を返したという。法律上や、世間体では、今更そんな事をする必要は全然無いのだと自分は思う。それを自らすすんでやつたのだ。

考えて自分は困つた。客人を泊めて、とんだ苦しみの種子を播いてしまつた。……と思つたが、今更仕方がなかつた。

あゝ、捨吉も、善兵衛も、強いられていや／＼乍らやつたのではない。みんな自発的に気持よくやつたのだ。思ひ出すもいやなことである。昔、分家の主人が急死した後には自分は急に怒が出て、悪をたくらんだ。それを分家の婆さんが気付いたらしく、気味の悪いことを言ひ出した。自分は「よく知らん者は黙つて居れ」と怒鳴りつけた。村の人

現れる意外の出来ごとである。予想せざる出来事であります。実に一生に於ける一大事であります」

区長「近年貴方から聞いている内に、何時の間にか、色々の事が起つた。捨吉の事、善兵衛の事、又近くは、善兵衛が、その分家へ財産を分けて、報恩感謝の行をしたこと、そこで私もい／＼考える様になつて来たので

す。人間一生は一生だ。一体何が人生の楽しみなのか。幸福とは何か。自分が生きたければ人も生きたいのだ。

自分が金を大切ならば、人も大切な善だ。自分の子が可愛ければ、人もそうだ。村の仕事もせず、他人のためにもならず、ただ自分の財産だけをためても、それで幸福であらうか。……と考える様になりました。

……私は自から進んで道を求めたのでありません。人に善行を見せつけられて、仕方なく考える様になつただけです。……こんな卑怯な悪い者は駄目でしょう」

信哉「卑怯な悪い者を呆れるというのでは、それは無碍の慈悲とは言われぬでしょう。無碍ですよ。碍りなしですよ！」

区長「そうですか。いかなるものにも碍げられないというのですか？」

信哉「そうです。無碍光です」

にも何か言う奴がいたので、自分は「死んだ分家と、俺の仲には人の知らぬ貸し借りがあるのだ。他人は黙つていてくれ」と叱りつけたら、人は、それからおれの前では何も言わないようになった。自分に損な約束は相手が死んだのを幸に、皆破つてしまつた。

……地位や、権力で、おどかして黙る奴には、おどしつけてやつた。都合の悪い事は死人にかずけてしまつた。これでは弱い者は、腹を立てるわけである。世にこれほど卑怯な、性質の悪い悪人はない。弱い者より幾倍も罪が深いかわからない。

……こんなことは人は知る筈はない。然し自分の心は知つている、今夜からは信哉さんも知つている。

死んだ分家の主人はさぞ恨んでいるだろう。生きている分家の者共は知らないからよい気なもんだ、罪な話である……死んだ処で極楽もない、地獄もない。この世も只楽しく勝手に暮せばそれでよい。世の中は嘘付ばかりだ。嘘の厚皮を被つているから、外からは中味はよく見えぬ。みんなそうだ、俺も人並だ。俺が地獄へ行けば人もみんな行くだろう。仲間が大勢いる。……

……それは思うが気がとがめる。なぜだろう。自分は子供や孫に「正直にせよ、人の物をとるな。良い子になれ」と訓している。世間でも学校でもみんなそうである。

自分は今年も区長をやっている。職務上からも人の前で「嘘は人並だ。盗みをしても見つからなければ良い」とはどうしても言われぬ。それどころか、村の入口には立札をたてて『物貰い、押売、落葉拾い、は村へ入るべからず』と書いて置く。又森林には盗伐を防ぐため山林看視人をつけて置く、丁度、国家に裁判官、警察がある様なものだ。そして区内で統裁しているのが自分の職務でないか。腹の黒いあきれたものだ。

日本の社会問題も、世界問題も、いや自分の家庭問題も起きるわけだ。金の有る者、権力の有る者、知識のあるものが、自分の有利の立場を利用して、自分の勝手ばかりをやれば、一人のために大勢が苦しむわけである。

……昔、権力のある本家や家長が非道のことをやれば封建制の弊害がひどかつただろう、分家や家の者が困つたであろう。

……資本家が金で人を酷使して、人格を認めない所に、労働問題がやかましくなるわけだ。権力のある役人や上役が、私利私欲をはかれば国政や会社が乱れるわけである。

信哉さんは、「法律や制度は勿論大切であるが、人間が立派にならなければ、何事もうまく行かぬ。……このことは民主政治の今の世でも同じ事である」と言つた。

意外の宝がある。意外の宝がある！

と思ひにふけつた。

その後しばらく区長は忙しそうであつた。或夜来て問うには、

区長「無碍光とは不思議の光ですね。

……私はこれからどうすればよいのでしょうか……」

信哉「一生治らぬ片輪を、どこまでも呆れ給わぬ無碍の光

を仰いで生きるばかりです。……片輪が治るのですね、それを気にしないで生きて行くのです。……何事か貴方の心から出るのです。あなたの心から、……

……他から押付けても意味がない。然し、向う様は無碍です。絶対です。五分五分を離れたお心です。

ありがたいと分つたら『あゝせよ、こうせよ』とは仰せられないのです。その法を守らぬものは罰する、とも申されぬ。

よく聞くことですが、信者となるには先ず金を出せ。信心して願が叶つたら、お礼の金を出せ。信者となつ

た者は何人かの新しい信者をつくれ。その法を守らない不信心のものには罰をあてる、というそうであるが真実の宗教にはこんな事がある筈がないと思う。人の

……

現に、自分の悪い事は誰も知らないから、表面、何の罪にもならないが、どれだけ人に迷惑をかけていることか。

その上、自分がもし分家であつて、本家からこんな風にされたらどう思うだろう、どうするだろう。

……こんな悪い者を、本当に呆れぬとは、何たる不思議のことであろう。

あゝ、今までは金ばかり尊い物はないと思ひこんで居た外聞ばかりを気にして来た。然し金は貯つても、外見は良くなつても、中味が腐つていては駄目だ。真の楽しみがない。夜中、静かに考えて見ても、少しも楽しみがない。貯めただけ、外見が良くなつただけ、分家よりは罪が深いわけである。自分ながら呆れはてた者である。……

『助けるとは、心を助けるのです。心を助けるには、金もいらぬ、権力もいらぬ、慈悲の心のみである。』ときいた。

今まで知らない宝があることを知らされた。金よりも、名譽よりも、権力よりも尊い宝があることを知らされた。

……無碍の光、絶対の慈悲。

この光に遇つてこそ、冷かなる氷もとけ、此の慈悲に照らされてこそ、暗い罪の心も開けて来るのであらう。

信心は全く自由なのです。金銭でも権力でも信心を植

えつけることは出来ないのです。自由に獲得した信心

ならば、金銭でも権力でも捨てさせることが出来ないのです。その代り生命をとるぞ、とおどかされても、やめることが出来ないでしょう。

真の宗教は絶対真実です。

一つの心で絶対に信心する宗教は一つしかあり得ない従つて信する者の姿は一心一向です。

感恩は懺悔心を生ぜしめ懺悔は報酬となる。そこには自然と秩序が現われて来る。

これは、五分五分思想からは、全く超越し、脱却している。それが無碍の慈悲です。まことにあり難い事です。

この絶対の御慈悲に浴してこそ、一生片輪の自分が、ひがまず、くじけず、悲観せず、生命のある限り真実を仰いで行けると思う。

金を返しても罪名は残る、これが治らぬ片輪というものでしょう」

或日、区長は善兵衛の家へぶらりと遊びに行つた。

区長「聞けばお前さんは、あの分家へ大変よいことをしてやつたそうじゃないか。」

善兵衛「いや、まあ、……考えて見れば当然のことだ。

わしも、若い時は、色々あはれて手を焼かせた者だ。大分に、分家の世話にもなつたからなあ……。それよりお前は、信哉さんの宿をして、人を集めたり、公民館へ品物を寄付したり、人の面倒を見たり、良い事をして、顔も広くなつたようだ」

という。それを聞くなり区長はギョツとした。

区長「いや、どうも……」

と言つて早く帰つた。その帰り途に思つた。……伴の嫁の家でさえ、あの通り俺を善人と信じている。ましてや世間の人は、本当の俺を知るわけがない。……然し自分の心は知つてゐる。心をあざむく事は出来ない。……

数日経つて、区長はまた一人で信哉の室へ訪ねて来た。区長「善兵衛の処へ遊びに行つたが、あの話は出せなかつた」、と言へば、

信哉「そうですか。そうでしょう。……」

相手は仏様お一人です。そしてお一人で十分です。

一、一、人に言うまでもないでしょう。

私共がいかにかくしても皆御存じです。また報告するまでもなく知つておいでです。

私も自分の片輪を治そうと、いろいろ苦心しました。そして思う様に治せませんでした。その一生の片輪を

七歩の詩

煮豆燃豆其

豆を煮るに豆其を燃やす

豆在釜中泣

豆は釜の中に在つて泣く。

本是同根生

本は是れ根を同じくして生じたるに

相煎何太急

相煎ること何ぞ太だ急なる。

(口訳) 兄さん、たとえば豆を煮るのに、よりによつて豆がらを焚かねばならぬ道理はないでしょう。豆は釜の中で泣いて、こう訴えます。私達はもとと云えば、同じ根から生れ育つた兄弟の仲、どうして私だけがこんなひどく煎りたてられなければならないのですかと。兄さん、よく胸に手をあてて考えて下さい。あなたは私を亡きものにしようとしていられる。私達は同じ腹から生れた兄弟ではありませんか。どうして兄弟同志が憎み合はねばならないのですか。あなたには肉親の情など一とかけりも持ち合はねばならないのですか。

察して、どこまでも呆れないお慈悲を聞いたとき、もう他人に見栄を張ることも、弁解することも、説明することもいらぬことだと感じました。

唯、無碍の光を信じましょう、仰ぎましょう。そしてそれで満足です」

これを聞いて、そうか、そういうことか、と思つて別れた。区長は寝てから考えた。……そうだ。何もかも御存じの上、片輪の治らぬのを可哀想と察して、その上、どこまでも呆れて下さらぬ御慈悲を聞けば、もう沢山だ。もうだれから見ても貰わなくとも、また誰に弁解する必要もない……。と。

翌朝、仏壇へ御灯明し、御香をあげてお参りした。

……一仏と対座……

無碍の光が腹の中まで透つて行く様に思つた。

誰も見て居ない。語る者も居ない。

御灯明は明るく、御香は香わしい。お花は、はなやかである……。続く。

(解説) 作者は魏の文帝の弟、子建。幼少の時から文を能くし、父の武帝に愛せられたので、兄の文帝がその才をにくみ、殺さうとして「七步あるうちに詩を作れ、出来ねば処分す」と命じたので、彼はすぐさまこれを作つた。兄の文帝はこの七歩の詩に感じてこれを許した、と伝えられる。

短歌草原誌所載

浜島 曉 訳。

無明の鬼

兄弟二人、親の病氣見舞に來りけるに、一人は道近ければ早く立ちけれど、暮れたれば前後も見えず、道に塚穴ありければ、屈み居て明くるを待ちける。然るに、一人は道遠くしてあとから來りけるより、その穴に落ちけるに、先に入りたる子は、鬼來りて我を喰わんとすらんと防ぎ、あとから來れる子は、穴に鬼ありて我をあやめむかと、互に掴みあいけるに、夜明けて見れば兄弟なり。生死の間に迷いおれば、皆無明の鬼なるべし。

一茶遺稿、父の終焉日、餘白言。

あとがき

御遠忌も無事にすみ、新緑風薫の好季となりました。先日はロス市から本山に参詣された若山夫妻と清水夫人を草庵に迎え、嬉しさ限りのないことでした。若山さんは店をこの期間閉ぢられての御参拝とのこと、四十年振りの故山を、そして真宗の現状を如何に感じられましたことか……。

第三日曜には新潟の佐藤強三郎様が突然御来庵下され、有縁の方々と共に半日を法雨に浴しました、ことに今回は御自誓を懇ろにお話し下され感銘の多いことでありました。

○
今月号から近角常観先生の五十年前の御遠忌を記念されて夏期求道会でお話し下さった教行信証の講話を引續いて頂くことにいたしました。御味読願います。

前に柳瀬留治様から承つたことでありますが、「椎茸や干鰯はそのままでは食べられないが、一度水で生かしてから適当に料

理するとおいしく頂けるように、御聖教も近角先生によつて一度水で生かしていただと、よく味読させて貰える」とは全く名言であります。教行信証の一番大切な信巻が、先生のお蔭でおいしく頂けますことを皆様と共に謝しまつることであります。

○
次に長谷さんの御書き下さいました通り三重医大の川畑愛浩さんが、とうとう三月十九日に亡くなられました。私と同様に心藏病で、煙草も数年前にやめ、療養を続けて居られましたが、米国留学二ヶ年の御若勞等も御無理でありましたのでしようか！
いたましい限りであります。

噫！すでに宝林壇上にあつて、私共の愚痴な姿を哀愍されて居ることでありましよう。

御案内

六月二日夜、六時半。一道会館。

長者窮児の譬 福島政雄 先生

市電新郊通一丁目下車。名鉄呼続駅下車。

国鉄笠寺駅より市電。

社告

六月から送料その他の値上につき定価を、一部二十五円半・分百五十円、一年三百円（送共）と致します。

但しすでに前納の方々はそれがすみずみまで据置きいたします。御諒承願います。

御案内

毎月、第一日曜、歎異抄。第二日曜、正信偈。第三日曜隨感隨想。午後一時半、一道会例会。

毎月廿四日、午前午後、市内昭和区小桜町、救西寺、法話会。

定価 一部 二十円（送共）

半年 百二十円（送共）

一年 二百四十円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番